



Title	Paradise Lost における epic simile に関する覚え書
Author(s)	森, 道子
Citation	Osaka Literary Review. 1970, 9, p. 92-106
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25730
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Paradise Lost における epic simile に関する覚え書

森 道 子

Paradise Lost における epic simile への影響やその背景を考察する場合、次の3分野が考えられる。第一に Homer の *Iliad*, *Odyssey* と Virgil の *Aeneid*, 及び三大悲劇詩人等のギリシャ・ローマの文学、第二に Ariosto の *Orlando Furioso* と Tasso の *Gerusalemme Liberata* に代表されるイタリアの romantic epic、第三に同国人 Spenser の *Faerie Queene* である。本稿では、この第一の場合を考える。

ここで述べる epic simile とは Homeric simile ともいわれるもので、Aに例えられたBが、B自身にのみ関係があり、Aからは離れた世界を低徊する長いものである。Miltonはこの Homeric simile を *Paradise Lost* の随所に用いているが、Homer, Virgil に比べると少い。そして Homer ほど定型化してしまうこともなく、単調に墮すこともなく、変化に富んでいる。*Paradise Lost* における epic simile をその内容によって大きく分けてみると次の4つが考えられる。

第一に Homer すらすでに在った伝統をうけついで発展させた lion, wild boar, wolf 等の simile、及び、山羊、羊、山、木々、鳥、天体、風、海、波、急流等の simile は Homer にはくり返しきり返し、わずかの変化のみを伴って現われるものであり、Virgil がうけついでさらに発展させたものである。Virgilにおいても、simile の中で比較されるものに大きい変化はみられない。lion, wild boar, wolf, eagle, bull, 馬、獵犬であり、崖、大木（特にoak, pine）、風、波、嵐、急流等である。この型の simile は Milton には、Homer, Virgil に比べて数少く、内容も伝統的なものではなく、題材もかなり変化している。禿鷹、蛇、鳥、羊、山羊、山、

櫻の木，風，黒雲，稻の穂，秋の葉，planet 等に関して一つにつき一つの simile しかない。有名な Bee-Simile は 3 人とも 3 様に独自のものを創造して¹いて美しい。

第二の型の simile としてやはり Homer に多い，牧歌的なもの，当時の農夫牧夫の生活に取材したものがあげられる。Milton は英國の田園生活や農夫に関する美しいものを，わずかながら残している。²

第三に B. A. Wright が Similes from Voyages of Discovery と名付けて研究したもので，大きく近世へと移り変ってゆく動因となった地理上の発見や，地動説等に題材を求めたものがある。香料諸島を往復する fleet や cape of Hope, Galileo, Columbus 等に関するものである。固有名詞，特に異国の，それも東洋のものが頻出する。

そして第四の型にも固有名詞が頻出するが，ギリシャ，ローマの古い神話伝説，又は聖書にみられるものである。この型の simile は，比較された過去の人々や事柄の属性，及びその挿話によって，前述の 3 つの型より一層巾が広く，内在的であり，予言的要素が強い。ここでは，この第四の型の simile について考察する。

天使 Raphael は Adam と Eve に天上の戦いを語ってきかせる時，次のように前置きしている。

High matter thou injoin'st me, O prime of men,
 Sad task and hard, for how shall I relate
 To human sense th'invisible exploits
 Of warring Spirits; how without remorse
 The ruin of so many glorious once
 And perfet while they stood; how last unfold
 The secrets of another world, perhaps
 Not lawful to reveal? yet for thy good

This is dispens't, and what surmounts the reach
 Of human sense, I shall delineate so,
 By lik'ning spiritual to corporal forms,
 As may express them best, though what if Earth
 Be but the shadow of Heav'n, and things therein
 Each to other like, more than on Earth is thought? ⁴

同様の言葉で, Sin と Death が, Hell と The World とをつなぐ橋をかけわたしたことを, Xerxes が Asia から攻めてきて Europe を結び, ギリシャの自由をつなぎとめてしまったことに喻える simile の前置きがされている。これを考えると, Raphael の物語全体が一つの大好きな simile であり, 天上の戦いは *Iliad* における戦い, あるいは *Aeneid* における戦いに, 又は, Book I にある simile の如く, かっての伝説上, 史上の有名な勇ましい戦いに喻えられているといえる。

For never since created man,
 Met such imbodyed force, as nam'd with these
 Could merit more than that small infantry
 Warr'd on by Cranes: though all the Giant brood
 Of *Phlegra* with th'Heroic Race were join'd
 That fought at *Thebes* and *Ilium*, on each side
 Mixt with auxiliar Gods; and what resounds
 In *Fable* or *Romance* of *Uther's Son*
 Begirt with *British* and *Armoric Knights*;
 And all who since, Baptiz'd or Infidel
 Jousted in *Aspramont* or *Montalban*,
Damasco, or *Marocco*, or *Trebisond*,

Or whom *Biserta* sent from *Afric* shore
 When *Charlemain* with all his Peerage fell
⁵
 By *Fontarabia*.

そしてそれらを超えて美しく怖しく大きな戦いであったとしている。また、詩の主題も人間の不従順と裏切りへの神の怒りという今までのどの epic の主題よりも一層 heroic であるといっている。

On the part of Heav'n
 ...
 Anger and just rebuke, and judgment giv'n,
 ...
 argument
 Not less but more Heroic than the wrath
 Of stern *Achilles* on his Foe pursu'd
 Thrice Fugitive about *Troy* Wall; or rage
 Of *Turnus* for *Lavinia* disespous'd,
 Or *Neptune*'s ire or *Juno*'s, that so long
 Perplex'd the Greek and *Cytherea*'s Son;⁶

Milton はその epic の題材が、天国と地獄と楽園という目にみえないものであるため、常に目にみえない世界を目にみえる世界に、靈的な世界を肉体のある具体的な世界に還元して描き出し、語ろうとしている。そのため simile においても、比較されているものの間に単に視覚的、聴覚的要素よりも、精神的なもの、隠されたもの、内在的で予言的要素が強いのである。そして、その要素と最も密接に結びついているのが、古えの伝説上の人々、事件等に由來した第四の型の simile である。

例えば、Eve は Pandora よりも一層美しく飾られており、一層きれいである。しかし単に Pandora の美しさ、あらゆる美を与えられているということだけでなく、その美しさ故に人類を不幸へ陥しいれた、人類の woe の源となったことを語っている。

What day the genial Angel to our Sire
 Brought her in naked beauty more adorn'd,
 More lovely than *Pandora*, whom the Gods
 Endow'd with all thir gifts, and O too like
 In sad event, when to the unwiser Son
 Of *Japhet* brought by *Hermes*, she ensnar'd
 Mankind with her fair looks, to be aveng'd
 On him who had stole *Jove's* authentic fire.

語られていなくても、読者には、その Pandora がもっていた箱から最後に出てきたものが希望であったことが思い出され、Eve にも、その子孫にも同様に、希望が、再び楽園をとり戻すべき約束が与えられることが予感される。

又、心から罪を悔いて祈る Adam と Eve は Deucalion と Pyrrhaに喰えられる。後の 2 人が多くの子孫を得て栄えたように Adam と Eve も再び、初めの祝福の如く、多くの子、救世主を出すはえある子孫に恵まれることが思い起される。

最も美しく、多くの人に愛される楽園についての simile においても、すでに言われている如く、その庭の美しさだけでなく、やがて Proserpin のように、花をつみつゝ、Eve も地下の王 Satan に誘惑されるであろうことを予告している。次の Daphne の森も Castalia の泉も、Apollo に求愛され追いまわされた 2 人のエンフの名に因んだ秘かな聖域である。続

く Nysician isle と Mt. Amara も、 Lewis の指摘の如く⁸、 “hiding places” であり、秘かに、この上なく貴重に護られ、閉ざされているという樂園の image を浮彫りにするのに役立っている。

Not that fair field
 Of *Enna*, where *Proserpin* gath'ring flow'rs
 Herself a fairer Flow'r by gloomy *Dis*
 Was gather'd, which cost *Ceres* all that pain
 To seek her through the world; nor that sweet Grove
 Of *Daphne* by *Orontes*, and th' inspir'd
Castalian Spring might with this Paradise
 Of *Eden* strive; nor that *Nyseian* Isle
 Girt with the River *Triton*, where old *Cham*,
 Whom Gentiles *Ammon* call and *Lybian* *Jove*,
 Hid *Amalthea* and her Florid Son,
 Young *Bacchus*, from his Stepdame *Rhea's* eye;
 Nor where *Abassin* Kings thir issue Guard,
 Mount *Amara*, though this by some suppos'd
 True Paradise under the *Ethiop* Line
 By *Nilus* head, enclos'd with shining Rock.⁹

最も美しい女神 Venus に続けられた一行で、そのたぐい稀れなる美しさだけでなく、3人で美を競ったことから、後に来る Eve の虚栄心と高慢心を、その時の金のりんごから、Eve がもぎとる実を、そしてその争いの結果起った禍い多いトロイ戦争から、それにもまさる人類の悲劇の迫ることを思い起させる。

又、歴史上名高い賢明な王 Solomon さえ、美しい女には弱く迷ったと

述べる simile は Book I のものと重って、Eve への愛故に背いた Adam を暗示する。

Spot more delicious than those Gardens feign'd
 Or of reviv'd *Adonis*, or renown'd
Alciorūs, host of old *Laertes' Son*
 Or that, not Mystic, where the Sapient King
 Held dalliance with his fair *Egyptian Spouse*.
 Much hee the Place admir'd, the Person more.¹⁰

...that uxorious King, whose heart though large,
 Beguil'd by fair Idolatresses, fell
 To Idols foul.¹¹

墮落後、Eve とたわむれて眠りから覚めた Adam は美しい Dalilah との眠りから目覚めて、怪力のもとである頭髪を刈りとられたのを知った Samson に喰えられる。Samson も Dalilah の美に溺れて裏切られ神に背いた。しかし、この 2 つにおいても、Solomon も Samson も共に最後には悔い改めて神に戻るということが暗示され、Adam の向う方向を示している。

Satan の大きさを様々に喰える代表的な simile においても、単にその大きさという点だけでなく、Titanian も Briareos も Typhon も神に反抗して罰せられ永劫の罰をうけたものであり、Leviathan も *Isaiah* にある如く、神に罰せられるべきものである。

同じく Satan の変じた蛇の愛らしさ美しさを伝説上の人々や神々の変じた蛇に喰える時も、2人の女性を魅了して、夫々 Alexander 大王と Scipio を産ませた Jupiter の話にふれる。それは続いて起る Eve の誘惑における Satan の勝利を暗示している。

... pleasing was his shape,
 And lovely, never since of Serpent kind
 Lovelier, not those that in *Illyria* chang'd
Hermione and *Cadmus*, or the God
 In *Epidaurus*; nor to which transform'd
Ammonian Jove, or *Capitoline* was seen,
 Hee with *Olympias*, this with her who bore
Scipio the highth of *Rome*.¹²

ギリシアあるいはローマの神 Vulcan の手によって、ギリシアの神殿の如く建造された Pandemonium を Babylon あるいは Memphis に喩えている。そして、たゞそれが豪莊華麗であることをいうためだけではなく、Babylon によって暗示される退廃と墮落と罪と汚れを示し、その虚栄とその偶像崇拜とその王達の愚行と墮落とは、Satan の属性を暗示している。

この種の simile は *Paradise Lost* に頻出する。古えの神話伝説上の人々や出来事に類例をみて列挙したり、それについて述べたりする。そして短く低徊する。その先例は *Iliad* に 1 つと *Aeneid* に 2 つある。*Iliad* のはとても短く、低徊する simile といえないほどであるが、故事にふれた珍らしいものである。

a dancing floor, like that which once in the wide spaces of Knosos
 Daidalos built for Ariadne of the lovely tresses.¹³

Aeneid では、第一に Dido を Diana に喩えたものがあるが、姿と美しさという描写的なものである。

As, by the banks of Eurotas or over the Cynthian slopes

Diana foots the dance, and a thousand Oreads following
 Weave a constellation around that arrowy one,
 Who in grace of movement excels all goddesses,
 And happiness runs through the still heart of Latona—¹⁴

第二は, Dido の悪夢を Pentheus のと Orestes のとに喻えている。

Just so does the raving Pentheus see covens of Furies and has the
 Delusion of seeing two suns in the sky and a double Thebes :
 Just so on the stage does Orestes, the son of Agamemnon,
 Move wildly about while his mother pursues him with torches
 and black snakes,
 And at the door the avenging Furies cut off his retreat.¹⁵

これは Milton のに最も近いが, 短く, 低徊も少く, 内在的でもなく, 予言的要素という点においても欠ける。 Pentheus と Orestes とは異った運命を辿っているし, Dido のも又違う。たゞ, 悪夢にうなされるという点においてのみ一致するのである。 Milton ならこの simile から大きくヒントを得て, あれだけのものを創造し得たであろうが, *Paradise Lost* への影響少からぬギリシア悲劇も見逃すことはできない。

Sophocles の *Antigone*において, 神聖な地テーベの高貴な家柄に生れて, 罪咎なく敬虔であったのに, 不当な扱いをうけて牢獄にひかれてゆく Antigone をみて歌う Chorus は, 古えの伝説の中に同様の運命を辿った人々の上をさすらう。

Danaë suffered too.
 She went from the light to the brass-built room,
 chamber and tomb together. Like you, poor child,

she was of great descent, and more, she held and kept
the seed of the golden rain which was Zeus.

Fate has terrible power.

Remember the angry king,
son of Dryas, who raged at the god and paid,
pent in a rock-walled prison. His bursting wrath
slowly went down. As the terror of madness went,
he learned of his frenzied attack on the god.

Fool, he had tried to stop
the dancing women possessed of god,
the fire of Dionysus, the songs and flutes.

Where the dark rocks divide
sea from sea in Thrace
is Salmydessus whose savage god
beheld the terrible blinding wounds
dealt to Phineus' sons by their father's wife.
Dark the eyes that looked to avenge their mother.
Sharp with her shuttle she struck, and bled her hands.

Wasting they wept their fate,
settled when they were born
to Cleopatra, unhappy queen.

She was a princess too, of an ancient house,
reared in the cave of the wild north wind, her father.
Half a goddess but, child, she sufferd like you.

いずれもみな高貴の生れであり乍ら、血縁の者の手で牢獄につながれ、

苦しんだものばかりである。そしてその3人の死は、Antigoneの死を予告している。

この型の Chorus はもう1つ Sophocles にある。非道な扱いをうけて、孤島に10年間苦しんだ Philoctetes をみて、Chorus は、一度だけ昔の話にきいたことがあると歌う。

In story I have heard, but my eyes have not seen
him that once would have drawn near to Zeus's bed.
I have heard how he caught him, bound him on a running wheel,
Zeus, son of Kronos, invincible.¹⁷

視覚的には異なるが、表現できない程の苦痛と苦悩という点で、Ixion と Philoctetes とは一致するのである。

又、Euripides の *Medea* で、Medea が不義の夫への腹いせから、その間にできた息子2人を自らの手で殺害したことを知った Chorus は、伝説上の女性 Ino に思いをはせる。彼女も又、2人の男の子を狂って殺す。しかし、ここには、我子2人の殺害という同様の事柄だけでなく、対照がある。男まさりの、魔女の如き恐ろしい Medea の嫉妬と怒りに比べ、Ino は弱く、あわれで、すでに正妻のある Athamas に愛された故に、正妻の嫉妬と Hera の怒りとをかい、狂気にされて自らの意志によらず、我子を殺し、追われて地上をさまよった後、自らも海に身を投じて死んでしまう。夫の不義の相手を焼き殺して、2頭の dragon にひかせた Chariot に子供の死骸をくくりつけて天がけてゆく猛々しい Medea とは、全く対照的である。

There was but one in time past,
One woman that I have heard of,

Raised hand against her own children.
 It was Ino, sent out of her mind by a god,
 When Hera, the wife of Zeus,
 Drove her from her home to wander over the world.
 In her misery she plunged into the sea
 Being defiled by the murder of her children;
 From the steep cliff's edge she stretched out her foot,
 And so ended,
 Joined in death with her two sons.¹⁸

この対照も Milton の simile に折々現われる。Hell から脱け出て, Chaos を通りぬけ, やっと暁の微光のさす地域にたどりついた Satan は, 輝く天の門から下ろされているはしごを遙かに見つける。そのはしごは, 夢の中で天使達が上り下りしていたというあの Jacob のはしごに喩えられる。しかし Satan は神の敵対者であり, Jacob は神に選ばれた者である。大きい gap と contrast が意図されていると Ricks は言っている。

The Stairs were such as whereon Jacob saw
 Angels ascending and descending, bands
 Of Guardians bright, when he from Esau fled
 To Padan-Aram in the field of Luz,
 Dreaming by night under the open Sky,
 And waking cri'd, *This is the Gate of Heav'n.*¹⁹

次に継子 Hippolytus への不倫の恋に悩む Phaedra を眼前にみて, Hippolytus の Chorus は愛の神の仕業の怖ろしさを, 人間になされた数々の災いと破滅とを過去の伝説の中に思い起す。

The Oechalian maiden who had never known
 the bed of love, known neither man nor marriage,
 the Goddess Cypris gave to Heracles.

She took her from the home of Eurytus,
 maiden unhappy in her marriage song,
 wild as a Naiad or a Bacchanal,
 with blood and fire, a murderous hymenaeal!

O holy walls of Thebes and Dirce's fountain
 bear witness you, to Love's grim journeying :
 once you saw Love bring Semele to bed,
 lull her to sleep, clasped in the arms of Death,
 pregnant with Dionysus by the thunder king.²⁰

ここで歌われている2人の女性 Iole と Semele はどちらも、自らの恋というより恋されたのであり、相手の Herakles と Zeus の正妻の嫉妬と復讐から恐ろしい目に会う。Herakles は婚礼の日に花嫁 Iole の目前で、燃える呪いの衣に身体をやかれて死に、Semele も雷に打たれて死ぬ。こうしてこの Chorus は、平穏無事ならぬ Phaedra の恋の行末を予告しているのである。

以上のように、古く遠い伝説、神話の世界に思いをはせて、類例をみつけることにより、現実の悲劇から逃避して憩うのはギリシャ悲劇の Chorus がしばしばすることである。それは最初の Aeschylus には全くみられず、Sophocles に2、3あり、Euripides に多いのである。Euripides の Chorus は、その悲劇と同じく、伝統的古典的ギリシャ悲劇からそれでいた独特のものである。

Their (the Chorus's) attitude is less sympathetic ; and instead

of expressions of emotion or pensive meditations, they occupy the pauses of the play with long and ornate descriptions of some legendary event,...

彼の Chorus の効果は ‘relief’ にあるという Murray は、前述の、*Medea* が子供を殺した直後の Chorus を引用して、次のように言っている。

...and in a moment we are away in a beautiful remote song about far-off children who have been slain in legend. That death-cry is no longer a shriek heard in the next room. It is the echo of many cries of children from the beginning of the world, children who are now at peace and whose ancient pain has become part mystery and part music. Memory—that Memory who was mother of the Muses—has done her work upon it.²²

Milton の simile も非常にしばしば、relief として用いられているし、記憶の女神の働きも彼において、ギリシャ悲劇詩人達においてよりも一層絶妙である。Milton はそのギリシャ悲劇的作品 *Samson Agonistes* において、Aristoteles の称讃した Sophocles 的 Chorus を用いているが、彼の最も愛好した悲劇詩人は、Euripides であったといわれている。

注

1. D. P. Harding, “Milton’s Bee-Simile,” *JEGP*, Vol. 60, 1961, pp. 664-69.
2. *Paradise Lost*, ii, 488-95; ix, 634-42; xii, 628-32.
3. B. A. Wright, *Milton’s Paradise Lost* (London, 1962), pp. 107-17.
4. *Paradise Lost*, v, 563-76.

5. *Ibid.*, i, 573—87.
6. *Ibid.*, ix, 8—19.
7. *Ibid.*, iv, 712—19.
8. C. S. Lewis, *A Preface to Paradise Lost* (New York, 1961), p. 43.
9. *Paradise Lost*, iv, 268—83.
10. *Ibid.*, ix, 439—43.
11. *Ibid.*, i, 444—46.
12. *Ibid.*, ix, 503—10.
13. *Iliad*, xviii, 591—92.
14. *Aeneid*, i, 498—502.
15. *Ibid.*, iv, 469—73
16. *Antigone*, 944—87.
17. *Philoctetes*, 676—79.
18. *Medea*, 1281—90.
19. *Paradise Lost*, iii, 510—15.
20. *Hippolytus*, 545—62.
21. A. E. Haigh, *The Tragic Drama of the Greeks* (New York, 1968), p. 253.
22. G. Murray, *Euripides and His Age* (London, 1946). pp. 158—59.